

TRANS

『『翻訳』の諸相』研究会 Newsletter No.12

2005/01/14

活動状況（「お知らせ」は 4 ページに載せています）

◆第一研究班が、以下の要領で、第 12 回研究会と第 13 回研究会を開きました。

第 13 回研究会

日 時： 2005 年 1 月 8 日（土） 午後 1 時より

場 所： 京大会館 213 号室

報 告： 若島 正（京都大学）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 4 歌第 32 連から第 4 歌第 51 連まで」

第 12 回研究会

日 時： 2004 年 11 月 6 日（土） 午後 1 時より

場 所： 京大会館 213 号室

報 告： 若島 正（京都大学）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 4 歌第 32 連から第 4 歌第 51 連まで」

コメンテーター： 秋草俊一郎（東京大学大学院）

参加者： 秋草俊一郎、柿沼伸明、小西昌隆、中田晶子、三浦笙子、皆尾麻弥、若島 正（以上 7 名）

参加者がふだんより少なく、多少寂しい会になりましたが、この研究班で独自の報告書を作成する件についても議論しました。

（上記の研究会の詳しい報告は次号に掲載します）

エミール・ゾラとドイツ医学

林田 愛

フランスの自然主義文学を代表するエミール・ゾラ Émile Zola (1840-1902)は医学書をよく読んでいた。それは彼にとって医学が人間探求の新しい方向を示すものに思えたからである。ここではゾラがホメオパシーに寄せた関心について考えてみたい。ゾラはアルフオンス・テスト著『いかにしてホメオパシー医師になるか』 *Comment on devient homéopathe* (1865) を読み、「病気が軽度の症状であれば、この身体にやさしい治療の方がよい」と述べて、明らかにこの医療に関心を抱いている (1868年6月6日「サリュ・ピュブリック」紙)。ホメオパシーとはドイツ人医師ハーネマン Christian Friedrich Samuel Hahnemann (1755-1843)が考案した自然療法の一つであり、1810年に『医学原論』 *Organon der rationellen Heilkunde* の初版が本国ドイツで刊行されるが、初のフランス語訳は1824年に出ている。ハーネマンの打ち立てた三大法則の一つである「類似の法則」によれば、身体に特定の症状を引き起す物質には、それに類似した疾患を治す効力があるということになる。ハーネマンはこの治療法を、「その病気に似たもの」を意味するギリシア語から造語して「ホメオパシー」と名づけた。これとは逆に、熱を下げるのにアスピリンを用いたり、高血圧の治療に降圧剤を使用するなど、症状を対立物で抑えこむ治療法を、ハーネマンは「アロパシー」と呼んだ。

医学史家のオリヴィエ・フォーレ Olivier Faure によれば、ホメオパシーがフランスに浸透した直接の契機は、1832年のコレラ流行の際に、ブルッセ Broussais (1722-1838) など近代医学の信奉者たちが従来の瀉血を続けて惨憺たる結果をもたらしたのに対し、デ・ギイディ Des Guidi (1769-1863) などのホメオパシー医師が一定の成果をあげたことにあるという。上にあげたテストの著作を刊行したバイエール出版社はホメオパシー医療をフランスに普及させる役割を果たした。ゾラが「アロパシー医学とホメオパシー医学の大きな論争は未だ終わっていない」と嘆息したように、19世紀後半のフランスでは新しい科学知を追求する近代医学と、患者の自然治癒力を重んじるホメオパシーは真っ向から対立していた。テストの前掲書には、ホメオパシー医師が掲げる野心的企図を読み取ることができる。ホメオパシーを信奉し実践していたテストは、ブルッセに代表されるいわゆる「英雄医学」を「古びた学説」、「モリエールの偉大な医師たちのことば」として批判し、時代遅れの医学であると公言する。ホメオパシー医学は本来、古代のヒポクラテス医学の流

れを汲む生氣論に立脚しており、薬草から抽出した生薬を治療法にも用いたり自然治癒力を最大限に活用したりしていた。

だがホメオパシー医師たちには、近代医学に対抗するような斬新で独自の思想と治療法をもっているという自負があった。テストが皮肉る「モリエールの医師たち」の代表といえ、『病は気から』*Le Malade imaginaire* (1673)のディアフォワリュスやピュルゴンのように、患者に対して誠意を示さず、「ただ規則に従って」瀉下剤や刺絡(瀉血)を盲目的に施している傲慢な医師たちである。それに反して、自然療法としてのホメオパシーはまだ少数派にすぎなかったが、患者の身体に負担をかけないという理念をもっていた。ゾラのように一見進歩主義者に思える文学者がこのような自然療法に関心をもっていたことは注目に値する。

コレラや結核との戦いにおいても、ホメオパシーは近代医学の影でひそやかな活躍を果たした。結核に関して言えば、1780年から1830年にかけて、つまり英雄医学全盛の時代に最初の流行が頂点に達した。この病から人々が真に解放されるのは、1907年のコッホによるツベルクリン開発、カルメットの予防接種を経て1943年のストレプトマイシン発明を待たねばならない。クリマトセラピー *climatothérapie* やアロマセラピー *aromathérapie* などの自然療法で病気を予防したり、体を健康にしたりする、より原始的な考え方が人々に見直された。

ゾラの友人であったゴンクール兄弟は、小説『ジェルヴェゼー夫人』*Madame Gervaisais* (1867)のなかでホメオパシー医師を登場させている。持病の結核が悪化したジェルヴェゼー夫人は、ある日主治医に勧められてホメオパシーの診療所を訪れた。イタリア人パチフィコ・スカラフォニ医師は、本来臨床医であり解剖学も修めたが、アロパシー医学に絶望してホメオパシーに転向したという。興味深いことに、この医師は気は弱いが患者の側に立って物事を考える人間性あふれた人物として描かれ、ホメオパシーの生みの親ハーネマンを彷彿とさせる。医師の国籍がイタリアに設定されているのはゴンクールのアイデアかもしれないが、ドイツを発信源とするホメオパシーが翻訳を通してフランスやイギリスだけでなく他のヨーロッパ諸国に波及していったことは想像に難くない。

19世紀前半が近代医学に対する信頼によって特徴づけられるとしたら、その信念が大きく揺らぐ後半において、多くの人々が近代医学以外の治療法、つまり自然療法に救いを求めたのは当然の帰結であったかもしれない。だれもが健康を望んでいるが、どれほど科学的思考に頼っても、病気の治療にはつねに未解明の部分がつきまとうものである。この神秘に挑んだのがゾラの描くパスカル博士(『パスカル博士』1893)であり、この人物が紆余曲折の末に治癒の源泉を求めたのは、すべての生命が内包する自然治癒力であった。

お知らせ

◆ 第二研究班が、以下の要領で、第 7 回研究会「ルネサンス・古典主義時代の翻訳」を開きます。

日 時： 2005 年 1 月 22 日（土） 午前 10 時より 12 時 30 分まで

場 所： 京都大学文学部新館 2 階 第 2 演習室

報 告： 永盛 克也（京都大学）「16-17 世紀フランスにおける翻訳の諸相—ユマニスムから古典主義へ」

伊藤 玄吾(京都大学研修員)「フランス・ルネッサンスにおける *lyrisme* と *spiritualité* の問題—『雅歌』の受容をめぐって—」

後記：

年が明け、寒さがいよいよ本格的になってまいりました。ニューズレター *TRANS* の 12 号をお届けいたします。今回は、研究科博士後期課程在学中の林田さんのエッセイを掲載しています。研究会の詳細な報告は次号までお待ちください。第一研究班は、班独自の報告書を作成する一方、昨年度の報告書の英文版を作り、pdf ファイル化する作業を進めています。第二研究班は、上記のように、近々第 7 回研究会を開催いたします。多くの皆様の、本研究会活動へのご参加をお待ちしております。

研究会事務局

〒606-8501

京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科

英米文学研究室（担当：河井）

tel./fax: 075-753-2828

e-mail: trans-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp

web page: <http://www.hmn.kyoto-u.ac.jp/trans/>